

# フローチャートによる不登校の分類とその対応

白井 祐 浩

本論文は、「①判断のための視点」として、「学校を休む原因が学校にあるかどうか」、「精神的・身体的・発達的な問題を抱えているかどうか」、「生活リズムの乱れ・ゲーム依存の問題があるかどうか」、「学校に対するモチベーションがあるかどうか」、「学校を休む積極的な理由があるかどうか」という5つの視点をもとにした「白井式不登校・不登校傾向児童生徒のタイプ分けフローチャート」を提示した。そして、このフローチャートに沿って、不登校をいじめや教師に対する不信感など学校生活の中に不登校の原因がある「学校生活上の問題タイプ」、不登校に精神疾患や身体疾患、発達的な特性の影響が想定される「精神的・身体的・発達的問題タイプ」、生活リズムが乱れて昼夜逆転していたりゲーム依存により生活習慣が乱れているという特徴がある「生活リズムの乱れ・ゲーム依存タイプ」、学校に対するモチベーションはあるけれどもなぜか学校に行こうとすると身体症状や拒否反応が出てしまう「学校に行けないタイプ」、目指しているものがあるために学校を休んだり家庭の事情によって学校を休むという選択をしているなど学校に行かないことに対する積極的な理由が見られる「自分の意志で休むタイプ」、学校に行く意味は感じられないが何か他にやりたいことも見いだせない「学校に行く意味がないタイプ」の6つのタイプに分類した。

さらに、筆者のスクールカウンセラーの経験をもとに各タイプの「②特徴と対応のポイント」、「③教師の具体的な関わり方のポイント」、「④保護者の具体的な関わり方のポイント」及び、全てのタイプに共通した「⑤全体として知っておくよいこと」について記述した。

## 不登校の現状

不登校とは、文部科学省によると「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」として定義されている学校不適応の状態である。文部科学省(2022a)の児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査によると、令和3年度の不登校児童生徒数は、義務教育課程では小学校で81,497人、中学校で163,442人で、小中学校を合わせると244,940人と25万人に迫っており、増加傾向にあるとしている。また、高校において、50,985人と5万人を超える不登校生徒がおり、不登校への対策は教育において重要な問題となっている。

## 不登校の考え方

ところで、文部科学省（2022b）の不登校に関する調査研究協力者会議報告書別添資料1において、不登校児童生徒への支援に対する基本的な考え方として、「不登校児童生徒への支援は、「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要があること」と「不登校児童生徒が主体的に社会的自立や学校復帰に向かうよう、不登校のきっかけや継続理由に応じて、適切な支援や働き掛けを行う必要があること」を提示している。また、文部科学省（2022c）の不登校に関する調査研究協力者会議報告書概要では、「登校という結果のみを目標とせず社会的自立を図ること状況によっては休養が必要、学校に行けなくても悲観する必要はなく様々な教育機会を活用」する必要性について述べている。このように、不登校は児童生徒が抱えている問題の結果として表現される一つの状態像であり、単に登校できるようになることを目指すのではなく、児童生徒が主体的に生きていけることを支援することが重要だと言える。何の意味も理由もなく不登校になるということはない。不登校という状態は児童生徒の抱えるテーマに対する「もがき」の表現であり、主体的に生きるための「苦肉の策」であり、児童生徒自身も意識できていないかもしれない本人の実現傾向が教えてくれている大切な「内なる声」であると考えられる。不登校を考える上では、不登校の状態や問題だけに目を向けるのではなく、この「もがき」や「苦肉の策」、 「内なる声」に目を向けること、言い方を変えると、不登校の背景にある児童生徒のテーマをきちんとアセスメントすることが重要であると考えられる。

## 不登校の分類

さて、一言で不登校と言っても、その在り様は様々であり、基本的には個々の事例ごとのオーダーメイドの対応が必要であろう。しかしながら、多様な不登校児童生徒に対応する必要がある教師等が一から個々の事例に応じた対応を考えることは非常に大きな負担となる。そのため、大まかな不登校の類型化と対応の指針が示されることは教師等にとって役に立つと考えられる。そこで、これまで示されてきた不登校の分類についていくつか概観する。

不登校の分類は、古くは小泉（1973）が、「神経症的登校拒否」、「精神障害によるもの」、「怠学傾向」、「積極的－意図的登校拒否」、「一過性の登校拒否」の5つ

のタイプに分類している。また、「神経症的登校拒否」はさらに、タイプA「優等生の息切れ型」とタイプB「甘やかされたタイプ」に分けられ、「怠学傾向」は、「無気力傾向」と「非行傾向」に分けられている。

村上（2008）は、小泉（1973）の不登校の分類を再定義し、学校文化に適応的でありすぎるあまり、学校的な価値観の抱える矛盾がそのまま本人の問題のようになり、ついには学校に行くことができなくなるタイプである「学校文化に“過適応的”な側面の見られる不登校」、学校文化に適応しようと努力しても、学校のもつ何らかの文化に適応しきれないにもかかわらず、学校というシステムを忌避しきれぬままに、学校が重荷になり、ついには学校に行くことができなくなるタイプである「学校文化に“不適応的”な側面の見られる不登校」、学校文化に適応しようという本人の意思が家庭環境的要因などで阻害されているタイプである「学校文化に“未適応的”な側面の見られる不登校」、学校の文化に反発を感じるあまり、学校というシステムを壊そうという方向に働いたり、学校を忌避して別の所に居場所を求めたりし、学校には行かないタイプである「学校文化に“反適応的”な側面の見られる不登校」、学校へ“行く理由”が消失しており、葛藤が乏しいタイプである「学校文化に“非適応的”な側面の見られる不登校」の5つのタイプに分類し、支援のポイントについて述べている。

伊藤（2007）は、教師の視点から、耐性と社交性の2軸をもとに不登校を「両欠如群」、「耐性欠如群」、「非社会群」、「健康群」に分類している。そして、「両欠如群」は関わりが難しさから長期的視点が必要であること、「耐性欠如群」は非行やいじめなど問題児として認識されやすく、耐性をつけさせる対応は逆効果であること、「非社会群」は学校関係者が関わることで改善がみられること、「健康群」は病欠が多く病欠に注意をすることと関わりが薄くなりやすいことに注意する必要があることが述べられている。しかしながら、この研究ではそのような特徴を持つ生徒に対する具体的な対応については述べられていない。

また、五十嵐・荻上（2002）は、不登校傾向尺度を作成し、その結果から不登校傾向の中学生を「別室登校を希望する不登校傾向」、「精神・身体症状を伴う不登校傾向」、「遊び・非行に関連する不登校傾向」、「在宅を希望する不登校傾向」の4つに分類している。

そして、文部科学省（2014）は、「不登校に関する実態調査」の中で、不登校をその原因から「無気力型」、「遊び・非行型」、「人間関係型」、「複合型」、「その他型」の5つに分類しているが、この調査ではこのように分類が可能であることを示すに留まっている。

以上5つの分類について紹介したが、この他にも不登校の分類は数多く見られる。

## 本論文での不登校の分類の視点

上述したように、不登校の分類は様々に行われているが、これらの分類を現場での実践に役立てるためには、どのようなことが必要になるだろうか。

まず第一に、現場の教職員やスクールカウンセラーなどの実践者が、児童生徒がどのタイプなのかを判断できることである。そのためには、どのような原因や状態が見られたならばどのようなタイプに分類されるのか、逆に、判断をするためにはどのような情報が必要なのか、実践者が不登校のタイプを考える上での「①判断のための視点」を提示することが重要になる。

第二に、分類に当てはまる児童生徒に対する対応の仕方を示すことである。分類ができたとしても、それぞれのタイプがどのようなもので、どう対応をすればいいのかがわからなければ、その分類は実践者にとっては役に立たない。それぞれの不登校のタイプに対して、どのような点に気をつけて関わっていけばいいのか、各タイプの「②特徴と対応のポイント」を提示することも大切である。

第三に、教師として具体的にどのような対応をすればよいかについて示すことである。これまでの分類においても、対応の大まかな指針が提示されているものは見られたが、実際に児童生徒と関わる教師として具体的な関わりポイントについて示されている研究は少ない。しかしながら、教師として知りたいのは、具体的に何を、何をしなければいいのかという点である。このような「③教師の具体的な関わり方のポイント」も示すことができれば、教師にとって利用しやすい分類になるだろう。

第四に、保護者として具体的にどのような対応をすればよいかについて示すことである。不登校の対応は教師だけではなく、あるいは教師以上に保護者の関わりも重要となる。教師が児童生徒に対して妥当な対応をしていたとしても、保護者の対応がうまくいっていなければ不登校の問題は解消しないだろう。不登校の背景にあるテーマには保護者が関わっていることも多いため、不登校への対応には保護者との連携が不可欠である。文部科学省(2019)は、「不登校児童生徒への支援の在り方について(通知)」の中で「保護者と課題意識を共有して一緒に取り組むという信頼関係をつくることや、訪問型支援による保護者への支援等、保護者が気軽に相談できる体制を整えることが重要である」ことを指摘している。そ

のような連携を行う上で、「④保護者の具体的な関わりポイント」を押さえておくことは役に立つと考えられる。

第五に、不登校のタイプにかかわらず、不登校の支援を行う上で共通して重要なポイントについて「⑤全体として知っておくとよいこと」を示すことである。これには、児童生徒の理解や関わりにおいて重要な考え方や、保護者との連携を行う上で重要な考え方などが含まれている。

以上の点を踏まえて、本論文では、筆者がスクールカウンセラーとして不登校児童生徒に関わる上で大切にしているアセスメントのポイントを「①判断のための視点」として提示し、それをもとにした「白井式不登校・不登校傾向児童生徒のタイプ分けフローチャート」を示す。これは、不登校・不登校傾向のタイプをわかりやすく判断できるように作成したものである。その上で、各タイプの「②特徴と対応のポイント」、「③教師の具体的な関わり方のポイント」、「④保護者の具体的な関わり方のポイント」及び、全てのタイプに共通した「⑤全体として知っておくとよいこと」についても論じる。

## 判断のための視点

筆者は10数年に渡ってスクールカウンセラーとして不登校児童生徒に関わってきたが、その際に、いくつかの視点をもとにアセスメントをし、対応を考えてきた。そのアセスメントの大まかな視点として以下の5つがある。

- ・学校を休む原因が学校にあるかどうか
- ・精神的・身体的・発達のな問題を抱えているかどうか
- ・生活リズムの乱れ・ゲーム依存の問題があるかどうか
- ・学校に対するモチベーションがあるかどうか
- ・学校を休む積極的な理由があるかどうか

もちろん、これらの視点だけでアセスメントをしているわけではないが、本論文ではこれらの5つの視点をもとに不登校のタイプを分類している。一つ一つの視点について説明していく。

まず最初に見るべき視点は「学校を休む原因が学校生活の中にあるかどうか」である。例えば、いじめやられていたり、友人関係のトラブルがあったり、教師に対する不信感があるような場合がある。不登校の原因が児童生徒自身の問題な

のか、学校環境に何らかの問題があるのかを区別することは重要である。

次に「精神的・身体的・発達のな問題を抱えているかどうか」である。不登校になる児童生徒の中には、精神疾患の症状に苦しんでいるために学校に来れない人や、発達障害の特性を持っているため学校にうまく適応できない人がいる。また、起立性調節障害や片頭痛、月経前不快気分症候群（PMDD）など身体的な問題を抱えていて学校に来れない場合もある。不登校の原因にこれらの疾患や障害が影響しているかどうかの判別も、適切な対応を取る上で重要となる。

3つ目に、「生活リズムの乱れ・ゲーム依存の問題があるかどうか」である。これは、生活習慣に関する視点である。生活リズムの乱れやゲーム依存で夜遅くまで起きていて朝起きれず、不登校になる事例も多い。このような生活リズムも不登校を考える上で重要な視点となる。

4つ目は、「学校に対するモチベーションがあるかどうか」である。不登校の児童生徒の中には、「学校に行きたい」、「学校に行かないといけない」と思いながらも行けない人がかなり多く見られる。モチベーションがあるけれど学校に行けないということは、その児童生徒の中に何かしらの葛藤があると考えられ、その解消が重要となる。モチベーションがあるかどうかによって関わり方が変わってくるため、これも重要なアセスメントとなる。

5つ目は、「学校を休む積極的理由があるかどうか」である。学校へのモチベーションがなく、「学校に行きたくない」、「行かない」という意思がある児童生徒の中でも、学校を休むことに対する積極的な理由がある場合と、積極的理由はないが、学校に行く意味が感じられないという場合がある。学校に対するモチベーションがないのは同じでも、理由がある場合と理由がない場合では、目指すものが異なるため区別が必要である。

## 白井式不登校・不登校傾向児童生徒のタイプ分けフローチャート

以上の5つの視点をもとに、白井式不登校・不登校傾向児童生徒のタイプ分けフローチャートを作成した（Figure1）。これは5つの視点について2択で選択していくことで、どのタイプの不登校なのかが判断できるものである。

不登校のタイプとしては、「学校生活上の問題タイプ」、「精神的・身体的・発達のな問題タイプ」、「生活リズムの乱れ・ゲーム依存タイプ」、「学校に行けないタイプ」、「自分の意志で休むタイプ」、「学校に行く意味がないタイプ」の6つに分類される。



注釈にあるように、あくまで大まかな分類であり、実際には一人一人の児童生徒で違いがある点については心に留めておく必要がある。また、発達障害の特性を抱えており、周りとうまく適応できずにいじめられて不登校になる場合のように、「学校生活上の問題タイプ」と「精神的・身体的・発達の問題タイプ」などの複数のタイプにまたがることもある。そのような場合は、両方のタイプのポイントを考慮しながら対応していく必要がある。さらに、不登校の状態とは固定的なものではなく、同じ児童生徒でも、時期やタイミング、状態像によって関わり方は変わるため、初めは学校に行かないといけな思っていたが、次第に学校へのモチベーションがなくなっていったというように、時間の経過によって「学校に行けないタイプ」から「学校に行く意味がないタイプ」に移行していくなどのタイプの変更もあり得る。その場合には、現在のその児童生徒のタイプに関する対応を見ていくとよい。

## 不登校・不登校傾向のタイプの特徴と対応

ここからは、それぞれのタイプの特徴、対応上のポイント、教師の関わり方のポイント、保護者の関わり方のポイントについて、筆者の臨床経験をもとに述べていく。

### 学校生活上の問題タイプ

最初の選択肢である「学校を休む原因が学校にあるかどうか」で、「学校を休む原因が学校にある」を選択した場合、学校生活上の問題タイプとなる。一方、学校を休む原因が学校にない、あるいは本人も原因がわからない場合は、次の選択肢に進む。

### 学校生活上問題タイプの特徴と対応のポイント

学校生活上の問題タイプは、学校生活の中に不登校の原因があるタイプである。その中には先に挙げた、いじめ、友人関係トラブル、教師に対する不信感の他に、勉強についていけないなどの原因もある。このようなタイプの児童生徒には、「学校に行きたくない」という強い気持ちと、「いじめられるから学校に行きたくない」や、「先生が怖く行きたくない」などの明確な意識化されている理由がある。

このタイプの対応としては、何よりもまず、いじめなど学校の中に問題を解決してから登校を促すことである。いじめやトラブルが継続している、あるいは継

続している可能性がある場合、誰でも登校しようとは思わないだろう。そのような状態で登校を促されれば、児童生徒は学校や教師に対する不信感を持つことになる。不登校の原因となっている問題が解決していることは、登校を促す大前提であり、もし問題が解決しないようなら、しばらく不登校を認めることも重要である。文部科学省（2019）は、「いじめられている児童生徒の緊急避難としての欠席が弾力的に認められてもよく、そのような場合には、その後の学習に支障がないよう配慮が求められること」としている。問題が解決してない中で無理に登校を促して自殺などにつながるよりは、問題が解決するまで学校から距離を置くことを認めた上で学力保証をするなどの対応をしていくことが求められる。

第二に、担任などに不信感を持っている場合は、まずは本人が信頼でき、関係を作りやすい教職員が関わることである。不信感を持たれている教師が関わろうとすることは児童生徒を余計に苦しめ、本人や保護者の不信感を煽るだけである。副担や管理職、養護教諭、部活の顧問などの中で児童生徒が信頼でき、関係を持ちやすいと感じている教職員（キーパーソン）を見つけ、その人を通して関係を作った上で担任などにつなげる橋渡しをしてもらうとスムーズだろう。とかく、担任は自分だけで対応しがちであるが、自身に関わることの影響を考慮し、もし悪影響の可能性があるなら、他の教師と連携をすることが重要である。

第三に、原因となる問題が解決したとしても、すぐに教室に戻れるわけではないことを肝に銘じておくことである。教師としては、問題を起こした児童生徒を指導し、不登校の原因が無くなればすぐに教室復帰ができると考えがちであるが、それは誤りである。仮にいじめなどの問題自体が解決したとしても、「急に学校に行ったら周りの人は変に思うかもしれない」と心配したり、「またいじめられるかもしれない」と不安に思うなど学校に対する不信感や恐怖心は簡単になくなるものではない。このような不信感や恐怖心は、少しずつ学校に来ることを試み、大丈夫だったという安心感を積み重ねていくことで、徐々に少なくなるのである。不信感や恐怖心を生じるのは一瞬だが、信頼感や安心感を作り上げるのには一步一步の積み重ねと一定の時間がかかる。そのため、「安心できたらいつでも戻ってきてもいいよ」という温かい雰囲気を作りながら待つことが大切だと言える。その際には、保健室登校や相談室登校など、本人が安心できる居場所を学校内に確保することも重要になる。そのような居場所を足掛かりとすることで、少しずつ「大丈夫だ」という安心感を作り上げていきやすくなる。

第四に、適応指導教室やフリースクールなど、学校外の機関の利用である。学校生活の中で問題を抱えている場合、学校以外の場所であれば行けることも多

い。そのため、本人と保護者が希望するのであれば、学校復帰に至るプロセスのワンステップとして適応指導教室やフリースクールを利用することも一つの選択肢である。文部科学省（2019）も、「児童生徒の才能や能力に応じて、それぞれの可能性を伸ばせるよう、本人の希望を尊重した上で、場合によっては、教育支援センターや不登校特例校、ICTを活用した学習支援、フリースクール、中学校夜間学級（以下、「夜間中学」という。）での受入れなど、様々な関係機関等を活用し社会的自立への支援を行うこと。その際、フリースクールなどの民間施設やNPO等と積極的に連携し、相互に協力・補完することの意義は大きいこと」としている。ただし、児童生徒の中には、もし行くのであれば学校に、という場合も多いので、あくまで本人の希望を優先することが重要である。そのような場合は、保健室や相談室などの学校内の居場所を活用することがより重要となる。

第五に、不登校の原因となる問題がどうしても解決できない場合は、転校も一つの選択肢だが、その場合は本人が転校を選択することである。基本的には、学校生活上の問題タイプ以外のタイプの不登校では、転校は問題解決にならない場合が多いように思われる。それは、学校環境自体に問題があるわけではないので、転校をしたところで本質的な問題は何かも解決していないからである。さらに言うと、転校は非常にリスクの高い選択肢である。なぜなら、転校をすると、それまでの人間関係を手放し、見知らぬ人たちの中で新しい人間関係を作っていく必要が生じるからである。友人から離れ、知り合いがいない場所に行くことは、非常にストレスfulな出来事であり、エネルギーがない状態の場合、状況は悪化する可能性の方が高い。しかし、学校生活上の問題タイプだけは学校環境自体に問題があるため、転校をして環境を変えることで登校できるようになる可能性がある。ただし、それには本人が転校を選択するという前提がある。転校には高いリスクがあり、うまくいかない可能性もある。本人が納得していないのに転校をしてしまうと、うまくいかなかった場合の責任を転校を勧めた周りに転嫁でき、「自分は転校なんかしたくなかったのに、親や教師に転校させられたせいで余計状況が悪くなった」と感じるだろう。逆に、転校することを自分で選択したのであれば、転校先の学校で行けなくなったとしても、それは自己責任となる。時に学校を変えれば行けるようになるのではないかという願いを込めて転校をさせたがる保護者がいるが、その時には本人がどう思っているのかについて話し合っ、本人のニーズを確認する時間を取る必要があるだろう。

#### 学校生活上問題タイプにおける教師の具体的対応のポイント

第一に、原因となっている問題の解決を行い、再発がないように指導すること、

また再発があった場合にも教師に相談できるような信頼関係を作ることである。いじめがあった場合は事実関係を確かめたり、加害者にきちんと指導を行うこと、また、本人は再度同じ状況になることへの不安が強いため、再発がないように対策を行うことが重要である。とは言え、いじめなどはいくら対策を取っても、再びいじめが生じる可能性はゼロにはならない。そこで、大切なのは、いじめが再発した時に教師に相談しようと思ってくれるような信頼関係を作ることである。相談をしてくれれば教師も何かしら対応のしようがあるが、そのためには相談をすればしっかり対応をしてくれると思ってもらう必要がある。児童生徒や保護者が最も教師に対して信頼を損ねるのは、相談をしたのに何も対応してもらえてないと感じた時である。教師が児童生徒や保護者の話を真摯に聞き、問題を解決しようとして対応をしたことが伝われば、それが大きな安心感や信頼感につながり、たとえ教師が行った対応がうまくいかなかったとしても信頼は損なわれず、次の対応を一緒に考えることができるのである。

第二に、学校が何か対応をした際には、その内容を児童生徒や保護者にきちんと伝えることである。原因となる問題に対してきちんと対応していたが、そのことを本人や保護者が知らないというケースに何度か出会ったことがある。いくら学校が問題に対して対応をしていたとしても、もしそれが伝わっていなければ、本人や保護者は学校は何もしてくれてないと感じ、学校や教師に不信感を持つことになる。報連相は、児童生徒や保護者との間でも重要である。学校の行った対応についての情報が本人や保護者に伝わって初めて、安心感が生まれ、不信感や恐怖心が和らいでいくのである。

第三に、謝罪や和解の儀式はむしろ逆効果になることが多いことを知っておくことである。いじめや教師の対応に問題があった場合など、教師はよく当事者を集めて謝罪をさせるという和解の儀式を行うことがある。しかしながら、筆者の経験上、これらは多くの場合、逆効果である。なぜなら、第一に、被害者となった児童生徒や保護者はそもそも加害者と会いたくもないという場合が多いからである。そのような被害者にとっては、加害者と会う機会を持つこと自体がストレスフルであり、外傷体験となり得る。第二に、謝罪する側が本当には反省しておらず、形だけの謝罪をした場合、そのことが被害者にとって傷つき体験となるからである。このような謝罪は、被害者側の意向を確認せずに学校が主導で行うことが多く、加害者の児童生徒は教師に言われたから謝罪する、あるいは加害者の教師が管理職に言われて謝罪する場合も多い。そのような加害者の態度は、当然被害者側の児童生徒には伝わるものである。その結果、被害者側は加害者が反省

をしていないことを痛感し、バカにされていると感じて傷つき、そのような場を作った教師や学校に不信感を抱くことになる。そもそも、被害者側の気持ちを無視して形だけの謝罪の場を作ること自体が、被害者の児童生徒や保護者の想いを軽視していることの現れである。これらの謝罪や和解の儀式は、前提として、①被害者の児童生徒や保護者が加害者に謝罪をして欲しいという気持ちがあること、②加害者が本当に自分のやったことを反省し、本気で謝罪したいと思っていることの2点があって、初めて意味を持つものである。学校側の考えだけで対応するのではなく、被害者の意向を確認し、それに従って対応することが大切である。

第四に、学校や教師に対する不信感や拒否感が強い場合には、頻繁な家庭訪問は控えることである。家庭訪問は不登校の対応として重要なものだが、学校や教師に対する不信感や拒否感がある場合、児童生徒や保護者はその対象となっている教師などには会いたくないと思っていることが多い。もしそのような教師が家庭訪問に来れば、それはストレス以外の何物でもない。まずは話しやすいと感じている教師やキーパーソンとなる教師を核として対応をする方がいいだろう。

ところで、中には、いじめや友人関係のトラブルが不登校のきっかけではあるが、実は背景に別の問題を抱えているという事例もある。そのような場合、学校生活上の問題タイプとして対応して、いじめやトラブルが解決しても不登校の状態は継続すると考えられる。そんな時は、再度フローチャートでタイプを調べなおして、対応する必要があるだろう。

#### 学校生活上問題タイプにおける保護者の具体的対応のポイント

第一に、子どもが悩みについて話せる関係を作っておくことである。カウンセリングの中でいじめなどがあり悩んでいるが、親にはそのことを伝えていないという事例と会うことがある。その理由としては、相談をすると親に心配や迷惑をかけてしまうからという親に対する気遣いによる理由と、話をしても親が聞いてくれないという理由がある。

子どもは大人が考えている以上によく周りを見ており、保護者を気遣ってなかなか相談しづらいことがある。あまり日常的に保護者と会話をしていない場合、悩みがあっても急には相談しづらいだろう。日頃からコミュニケーションを取る中で、悩んだ時にはいつでも相談していいというメッセージを伝えると共に、日常の他愛のない話の中でポロリと語られる悩みを拾い上げていけるといいだろう。

また、相談をしたが話を聞いてもらえなかったという場合もある。保護者も忙

しくてつい子どもの話を聴き流してしまったり、子どもが相談をした時に安易に「気にしないでいい」などのアドバイスを与えてしまうことがある。しかし、子どもからすると気にせずにいられないから悩んでいるのである。子どもが何か悩みを話した時は、安易なアドバイスをせず、まず子どもの話や気持ちをきちんと聴くことが大切である。

第二に、学校が問題に対応してない場合には、学校に問題の解決と再発の防止を依頼すると共に、子どもの命を守ることを優先することである。学校も問題に気づいていない場合もあり、また気づいていても対応が後手に回る場合もある。そのような時には、保護者からも学校に働きかけを行うことが重要である。

その際には、子どもの意向を把握することが大切である。いじめや教師に対する不信任などの話を聞くと、保護者の方が不安になり、子どもの意向を無視して動いてしまうことがあるが、これは逆に子どもの信頼を失うことになる。子どもによっては大事にしたいくないという場合もあるため、まずは子どもにどうして欲しいかを確認し、その意向に沿った形で対応することが大切である。

また、学校との友好関係を維持することも重要である。学校側に問題があると、学校と対立関係になりがちだが、このような問題は学校に適切に対応してもらわないと問題解決が進まない場合が多い。問題の原因や学校の責任を迫及するのではなく、子どもが安心して学校生活を送れるために、今後どのような対応ができるのかという、未来志向で話し合いができるといいと思われる。

一方で、学校に行くことで子どもがさらに傷つき、追いつめられる可能性があるのであれば、学校を休ませるなど子どもの命を守ることを優先した対応を取ることも大切である。学校に問題がある場合、学校が悪いのになぜ自分の子どもが学校を休まなければならないのかという思いが湧くのは当然だが、学校に行かせようとした結果、子どもが自ら命を絶つという事態は避けなければならない。また、そのような問題がある状態で学校に行ったとしても、勉強に集中できるはずもない。学校に行くことに拘るのではなく、子どもを守る対応をしていくことが大切である。

以上、学校生活上問題タイプについて述べたことをまとめたものを Table1 に示す。

Table1. 学校生活上問題タイプ

特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不登校の理由が学校にある。</li> <li>・学校に行きたくない強い気持ちと明確な理由がある。</li> <li>・いじめや友人関係のトラブルが不登校のきっかけではあるが、実は背景に別の問題を抱えているという事例もある。</li> </ul>
対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問題が解決してから登校を促す。問題が解決しないようなら不登校を認める。</li> <li>・まずは、本人が信頼でき、関係を作りやすい教職員（キーパーソン）が関わる。</li> <li>・原因となる問題が解決しても、すぐ登校できるわけではない。いつでも戻って来れる温かい雰囲気を作りながら待つ。安心できる居場所を確保する。</li> <li>・適応指導教室やフリースクールなどの学校外の機関の利用をする。</li> <li>・転校も一つの選択肢であるが、その場合も児童生徒自身が転校を選択する。</li> </ul>
教師の具体的対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・原因となっている問題の解決を行い、再発がないように指導する。再発があった場合には教師に相談できるような信頼関係を作っておく。</li> <li>・学校が何か対応をした際には、その内容を児童生徒や保護者にきちんと伝える。</li> <li>・謝罪や和解の儀式は無意味どころか、逆効果になることが多い。</li> <li>・学校や教師に対する不信任や拒否感が強い場合には、あまり頻繁に家庭訪問に行くことは控える。</li> </ul>
保護者の具体的対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが悩みがある時に話ができる関係を作っておく。</li> <li>・学校が問題に対応してない場合は、学校に対して原因となっている問題の解決と再発の防止を依頼すると共に、子どもの命を守ることを優先する。その際、子どものニーズを把握し、学校と友好関係を維持する。</li> <li>・問題の原因や学校の責任を追及するのではなく、子どもが安心して学校生活を送れるための今後の対応など、未来志向で話し合いをする。</li> </ul>

### 精神的・身体的・発達の問題タイプ

次に、「精神的・身体的・発達のな問題があるかどうか」で、「精神的・身体的・発達のな問題がある」を選択した場合、精神的・身体的・発達の問題タイプとなる。一方、精神疾患や身体疾患、発達のな特性などが不登校に影響をしている可能性がない場合は、次の選択肢に進む。

### 精神的・身体的・発達の問題タイプの特徴と対応のポイント

このタイプには、うつ病や統合失調症などの精神疾患を発症して登校できる状態ではなくなる場合や、片頭痛や起立性調節障害などの身体疾患の症状により登

校できない場合、発達の特性が原因で学校生活にうまく適応できずに不登校になるような場合などがある。いじめや勉強についていけないなど、不登校の原因が学校生活の中にある場合でも、精神疾患や発達障害、精神発達遅滞などの問題が背景にある場合もある。ただし、これらの問題があると必ず学校に行けなくなるというわけでもないため、このような問題が不登校にどのくらい影響を及ぼしているのかについてアセスメントすることが大切である。

精神的・身体的・発達の問題が不登校に影響を及ぼしている場合の対応としては、第一に、専門機関で医療的、療育的対応を行うことがある。このような問題は本人も困っている部分があるので、これらの問題が和らぐことで本人が楽になるところもある。

第二に、このような問題を抱える場合は叱っても無駄なことを知っておくことである。これらの問題は本人もコントロールできずどうしようもないため、叱られるほど傷つき、自責や他者への攻撃につながる。カナヅチの人に「どうして泳げないの!」と叱っても、泳げないものは泳げないし、周りから何を言われても、できないものはできないのである。そうではなく、泳げないのであれば浮き輪を使うなど泳げるための工夫をしたり、サポートを受けることが大切であり、それに当たるのが専門機関で相談することや合理的配慮を行うことだと言える。

#### 精神的・身体的・発達の問題タイプにおける教師の具体的な対応のポイント

第一に、これらの問題を抱える児童生徒に対しては、専門機関へのリファァーが重要である。学校によっては、管理職や養護教諭、生徒指導担当や教育相談担当の教師などがいろいろな専門機関とつながりを持っている場合もある。連携が得意な教師がいる場合には、その教師に専門機関へのつながりを頼んだり、児童生徒や保護者が信頼している先生やスクールカウンセラーなどの専門家からリファァーの話をしてもらうなど、学校内で協力し合いながらリファァーを行うと、よりスムーズに専門機関につながるができる。

第二に、必要に応じて特別支援や合理的配慮を受けられる体制を作ることである。特に発達の特性や精神発達遅滞を持つ児童生徒は、通常学級ではうまく力を発揮できない場合がある。そのような場合は、適切な環境を整えることで児童生徒の持つ力や強みを発揮しやすくなり、できることが増えたり、成長が促進され、結果として二次障害や不適応行動が少なくなる。

#### 精神的・身体的・発達の問題タイプにおける保護者の具体的な対応のポイント

保護者の場合も、基本的な対応は教師の場合と同じである。

第一に、確信がなくても、気になる点があれば、まず専門機関に相談すること

である。保護者からすれば、自分の子どもが疾患や障がいを抱えているとは思いたくないかもしれないが、早めにサポートを受けることで、子どもは体験しなくてもよい苦痛を減らすことができる可能性がある。また、もし問題がなければそれはそれで次の対応を考えることができるだろう。なお、もし子どもが専門機関に行きたがらないようであれば、まず保護者だけで相談するといいたいだろう。専門機関は継続的に通う必要があるため、仮に一度本人を無理やり連れて行ったとしても、その後継続的に通えなければ無意味である。

第二に、必要に応じて特別支援や学校のサポートを得ることである。その際、教師も対応に迷っている場合もあるので、専門機関に相談した場合はそこでのアドバイスなどを学校と共有すると、学校も対応しやすくなる。とは言え、学校も専門機関が求めることの全てに対応ができるわけではないし、子どもも必ずしもそれを求めない場合もある。専門機関での情報をもとに、本人のニーズと学校側でできることを話し合った上で、保護者と学校で統一した対応をすることが大切である。

以上、精神的・身体的・発達の問題タイプについて述べたことをまとめたものを Table2 に示す。

Table2. 精神的・身体的・発達の問題タイプ

特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不登校に精神疾患、身体疾患、発達特性の問題が影響している。</li> <li>・学校生活上問題タイプにもこれらの問題が影響している場合がある。</li> <li>・精神的・身体的。発達的な問題と不登校の理由とのつながりについて考える。</li> </ul>
対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専門機関でこれらの疾患や障がいに対する医療的、療育的対応を行う。</li> <li>・このような問題を抱える児童生徒は叱っても無駄である。</li> </ul>
教師の具体的な対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専門機関へのリファーが重要。連携が得意な教師に専門機関へのつなぎを頼む。</li> <li>・必要に応じて特別支援が受けられる体制や合理的配慮を行える体制を作る。</li> </ul>
保護者の具体的な対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気になる点があれば専門機関に相談する。子どもが専門機関に行くことに抵抗がある場合、まず保護者だけでも相談する。</li> <li>・必要に応じて特別支援や学校のサポートを得る。専門機関に相談に行った場合は、そこでのアドバイスなどを学校と共有する。</li> </ul>

### 生活リズムの乱れ・ゲーム依存タイプ

「生活リズムの乱れ・ゲーム依存が原因かどうか」で、「生活リズムの乱れ・ゲーム依存が原因」を選択した場合、生活リズムの乱れ・ゲーム依存タイプとなる。一方、生活リズムの乱れやゲーム依存が見られない場合は、次の選択肢に進む。

#### 生活リズムの乱れ・ゲーム依存タイプの特徴と対応のポイント

このタイプはネットやSNS、ゲームなどをしていて、深夜まで起きているために朝起きれずに、そのまま学校を休むような場合が含まれる。

生活リズムの乱れでは、朝に寝て、昼や夕方になってから起きるという睡眠時間の乱れや、食事を取らない、風呂に入らないなどの生活習慣の乱れが見られる。また、起きている間も気だるそうな様子で、物事に対する意欲の低下も見られる。

ゲーム依存では、家族がゲームをやめさせようとすることで家庭内暴力につながったり、外出しなくなり、引きこもり状態になりやすい。家庭内暴力のため、保護者が子どもの言いなりになることもある。また、外出しないため、人、社会、関心など色々なつながりが絶たれていきがちである。意欲の低下や頭痛、吐き気、肩こりなどの身体症状も見られる。なお、発達障害などが背景にあることもあり、特に ADHD とゲーム依存の関連が指摘されている（館農，2019など）。ICD-11がゲーム障害を、ゲームをすることに對する制御の障害と定義づけているように、本人もコントロールできないことが特徴であるため、本人の意志や、やる気の問題と捉えないことが大切である。

次に、生活リズムの乱れへの対応では、生活リズムを整える関わりが重要である。昼寝などをしないよう、休んでいる時なるべく学校に近い生活を整えるようにする。何もやることが無いと生活は乱れがちであるため、勉強や家事などの手伝いなど、何か役割を与えるのもよい。また、日光を浴びることはサーカディアンリズムを整えることになるため、昼間に日光に当たるよう、日中に散歩や買い物など外出をするのもいいだろう。このような生活習慣の改善が難しい場合は、睡眠導入剤などの投薬治療も有効である。

ゲーム依存への対応では、第一につながりを作ること、依存対象を広げることが重要である。依存症は頼れる存在や、つながりの少なさから生じると考えられる。健康な人は、家族や学校、趣味、社会活動など様々なものにつながり、様々なものに頼りながら生きている。しかし、依存症の人は、依存している対象しか依存できるものがない状態であり、多様な対象にきちんと依存ができない病気だと言える。松本（2018）は、「今日、欧米の先進国では、アディクション（Addiction：依存症、あるいは、酒や薬物に溺れた状態）とは「孤立の病」であり、そ

の対義語は、もはやソーバー（Cober：しらふの状態）やクリーン（Clean：薬物を使っていない状態）ではなく、コネクション（Connection：人とのつながりがある状態）であるという認識が広まりつつあります」と述べている。そのため、次のようなつながりを広げるアプローチが重要となる。

- ・人とのつながりを広げる：現実の中に一緒に話や行動ができる人（親、友達、教師など）を作る。
- ・興味・関心を広げる：ゲームの他に好きなもの、好きなこと、目標を見つけて、広げる。
- ・行動を広げる：手伝いや部活、散歩や筋トレなど、ゲーム以外でできそうな行動を見つけて増やす。
- ・社会とのつながりを広げる：家に引きこもるのではなく、家の外でつながりを作れるものを見つける。例えば、買い物、近所の人との交流、塾や習い事、専門機関などが含まれる。

第二に、専門機関を利用することも有効な場合がある。専門機関では、個別カウンセリングや集団精神療法、入院治療、家族会などが行われている。家庭や学校だけでは対応が難しい場合も多く、専門家から助言やサポートを受けることで、児童生徒とうまく関わられるようになると考えられる。

### 生活リズムの乱れ・ゲーム依存タイプにおける教師の具体的対応のポイント

第一に、児童生徒とのつながりを作ることである。ゲーム依存は孤立の病であり、つながりを作ることが重要となる。学校の中につながりが持てる人がいることは、孤立感を低減し、ゲーム依存から脱する一つの契機となり得る。そのため、継続的に家庭訪問を行い、本人との関係を作ることが有効だと考えられる。その際に大切なのは、つながりを作ること、すなわち関係づくりであるため、登校を促すような関わりではなく、例えば、現在やっているゲームの話聞くなど、本人の関心のある話をして、この人は話せる人だと思ってもらうことが重要である。また、友達の声かけや遊ぶ機会を持つことも、つながりを作ることになる。特に小学生などの場合は、仲の良い友達と関わられる機会を作ることも有効だと思われる。

第二に、参加できそうな活動や行事への参加を促すことである。児童生徒によっては、部活動や行事であれば参加できるという場合もある。部活動や行事だけの参加に抵抗がある教師もいるだろうが、これらの活動は学校という社会とつながれる一つのチャンスである。家でゲームをするだけの生活よりは、部活動や行事だけでも参加できる方が、社会とのつながりは保っている状態である。本人

が学校の活動に関心を持つときには、活動への参加を促し、その体制を作るとよい。

### 生活リズムの乱れ・ゲーム依存タイプにおける保護者の具体的対応のポイント

生活リズムの乱れに関しては、第一に、朝はしつこくない程度に声掛けをすること、朝に起きれるパターンを確認することである。生活リズムを整えようと、朝起きるように声掛けをする保護者は多い。この声掛けは生活リズムを意識するのに意味があると思われるが、一方で、何度も繰り返し声掛けをすることで、本人も保護者も不機嫌になり、関係が悪くなることもよくある。2～3回声掛けをして起きないようなら、それ以上声掛けをしても起きてくることはないだろう。予め声掛けに回数を決めて、それでも起きない時は無理に起こそうとしない方が、お互いストレスを抱えずに済む。加えて、朝起きることができるとパターンに注目することは重要である。朝起きられない児童生徒も、早く寝た日や、やらないといけなことがある日など、何かきっかけがあれば起きられる場合も多い。起きられる時と起きられない時の違いについて考えてみることは役に立つ。できないことに注目するのではなく、できることに注目してそれを広げていくことは、不登校の対応において重要な視点である。

第二に、家での役割や活動の機会を作ることである。日中に起きていることや、日光を浴びることが生活リズムを整えることにつながるが、起きている時間に何もやることがなければ、だらだら過ごしたり、昼寝をすることにつながる。学校を休んでいる間も家事の手伝いを頼んだり、買い物や散歩など外に出る機会を作るといいだろう。

ゲーム依存に関しては、第一に、保護者の考えだけでゲームを取り上げたりしないことである。本人にとってゲームは唯一のつながりを感じられる対象であるため、その唯一の依存対象を突然取り上げられてしまえば、パニックになったり暴力的になるのは当然である。依存への対応は依存対象を取り除く方向ではなく、依存対象を豊かにしていく方向で考える方がよい。

第二に、本人と家族でルールを決め、それを目立つところに貼っておくことである。ゲームを制限する場合は、ルールに沿って行うことが重要だが、ルールを保護者が一方的に押しつけても守られることはないだろう。ルールを決める際には、本人も含めて話し合い、それぞれの合意のもとに決めることが大切である。また、ルールは本人だけに適用されるものではなく、家族全員が守るものである。子どもにはスマートフォンの利用を禁止しているのに保護者が使っていれば、子どもは反発するだろう。子どもにルールを守るように求めるのであれば、保護者

もきちんとルールを守ることが大前提である。また、ゲームに熱中しているとルールを忘れがちになるため、目につくところにルールを書いた紙を貼っておき、すぐ確認できるようにするものいいだろう。

家族だけで対応が難しいと感じた場合は、専門機関を利用するとよい。もし、本人が拒否する場合は、保護者だけでも相談することで、関わり方の助言が得られたり、対応の道筋が見えることで保護者の不安を低減できるだろう。

以上、生活リズムの乱れ・ゲーム依存タイプについて述べたことをまとめたものを Table3 に示す。

Table3. 生活リズムの乱れ・ゲーム依存タイプ

特徴	<p>生活リズムの乱れ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・睡眠時間の乱れや生活習慣の乱れが見られる。起きている間も気だるそうな様子で、物事に対する意欲の低下も見られる。</li> </ul> <p>ゲーム依存</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭内暴力や引きこもり状態になりやすい。保護者が子どもの言いなりになる場合もある。依存は孤独の病であり、人、社会、関心などいろいろなつながりが絶たれていきがち。身体症状も見られる。コントロールの問題であり、意志ややる気の問題ではない。</li> </ul>
対応	<p>生活リズムの乱れ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生活リズムを整える関わりを行う。日中にやることや役割を与える。日光を浴びる。外出をするように試みる。</li> <li>・場合によっては投薬治療を受ける。</li> </ul> <p>ゲーム依存</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・つながりを作り、依存対象を広げる。</li> <li>・専門機関を利用する。</li> </ul>
教師の具体的対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童生徒とのつながりを作る。つながりを作るための継続的な家庭訪問は有効。仲の良い友達に様子を見に行ってもらうように働きかけることも有効。</li> <li>・本人が関心を持っており、参加できそうな活動、行事への参加を促す。</li> </ul>
保護者の具体的対応	<p>生活リズムの乱れ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・朝はしつこくならないように（2～3回）声掛けをする。</li> <li>・朝に起きれるパターンを確認する。</li> <li>・家での役割や活動の機会を作る。</li> </ul> <p>ゲーム依存</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者の考えだけでゲームを取り上げることはしない。ゲームは唯一のつながりである。</li> <li>・本人と家族でルールを決め、それを目立つところに貼っておく。決めたルールは家族で守る。</li> <li>・専門機関を利用する。本人が行きたがらない場合は、まずは保護者だけでも相談する。</li> </ul>

## 学校に行けないタイプ

「学校に行きたい・行かないといけないと考えているかどうか」で、「学校に行きたい・行かないといけない」を選択した場合、学校に行けないタイプとなる。一方、学校に行かないことを選択している場合は、次の選択肢に進む。

### 学校に行けないタイプの特徴と対応のポイント

このタイプの児童生徒は、自身も学校に行きたい、行かないといけないという気持ち強いが、学校に行こうとすると腹痛や頭痛などの身体症状が現れたり、強い不安から身体が動かなくなり、結果として学校に行けないという状態になる。学校へのモチベーションはあるため、夜に翌日の学校の支度をしたり、制服に着替えたり、宿題をするなど学校に行く準備をする場合も多い。また、休んでいる間に勉強をしたり、学校がある時間は外出をせずに過ごすことも多い。そして、学校を休んでいる間も心は休めておらず、エネルギーは低下し、暗い表情で過ごしている。学校をしばらく休むとエネルギーが回復してくるが、少し調子がよくなると学校に行こうとして疲れ、また行けなくなる。夜は学校のことを考えてなかなか眠れず、結果、朝起きれないこともある。また、背景に、両親間で問題があったり、保護者の注意が他のきょうだいに向き本人は放っておかれるなど家庭の状況が大変で学校に行く余裕がない場合もある。このタイプは不登校の児童生徒の中では比較的多いタイプと思われる。

対応としては、第一に、エネルギーが低下している場合が多いため、ゆっくり休んでエネルギーの回復を図ることである。このタイプは学校に対するモチベーションはあるため、エネルギーが回復したり、葛藤が解消したりすれば、自分から学校に行こうとするので、周りが登校を促す必要はない。むしろ真面目な分、学校に行く準備ができていない状態で登校を促すと、学校に行けていない自分を責め、葛藤を強くし、エネルギーを低下させ、結果、回復を遅らせてしまう。どうせ不登校をするのであれば、色々と思いついてエネルギーを浪費するよりは、本人が生き活きできる体験を十分に行う「豊かな不登校」(峰松、私信)を目指す方がよい。そのためには、本人がホッとできる時間、楽しそうな時間、嬉しそうな時間をなるべく広げていくことが重要である。

第二に、本人が安心できる居場所を作ることである。不安はエネルギーを浪費させるため、不安を抱える中で行動をするのはかなり疲れる作業である。同じ行動でも、安心できる状態であれば、行動しやすくなり、エネルギーも溜まりやすくなる。登校を試みる際も、安全基地を確保した上で少しずつチャレンジすることで、急激な落ち込みを防ぐことができる。

第三に、焦りは禁物である。このタイプは、少しエネルギーが溜まると学校に行こうとするが、結局すぐにエネルギーが枯渇してしまい、また行けなくなるということを繰り返すことが多い。特にまじめな児童生徒は、それまで全く学校に行っていなかったのに、いきなり1日6時間、週5日、教室に入ろうとすることがあるが、これは病み上がりの状態でフルマラソンを走るようなもので、途中でバテるのは当然である。まずは週1日、1時間、自分の好きな教科から始めたり、校門まで行くことや、保健室や図書室に顔を見せるところから始めるのもいいだろう。初めはそのような登校でも、帰ったら疲れてぐったりしているかもしれない。疲れてぐったりしている状態は、まだそのステップに留まるか、一步後退すべきサインである。週1日、1時間教室の登校でそれほど疲れず余裕が出てきたら、次のステップに進むというように、少しずつ回復していくのがよい。また、本人の体調は本人が一番よく分かっているため、次のステップに行けそうかどうかは、本人に体調を聞きながら検討するのがよい。ただし、もし本人が急に1日6時間教室に入ろうとするなど、周りから見て頑張りすぎていると感じる場合は、周りはブレーキ役として「そんなに頑張らなくていいんじゃない」というメッセージを伝えるといいだろう。急な大きな変化はどこか無理をしており、後々、以前より悪化する可能性がある。変化は少しずつ起こるのがいいのである。

ところで、時に、強引に連れていくことで学校に行けるようになる場合もあるが、これはうまくいかなかった時のリスクがかなり高い方法である。無理やり学校に連れて行った場合、その体験自体が傷つき体験となり、学校に対する恐怖や不安、不感や、無理やり学校に連れて行こうとした保護者への不感を抱くようになる。学校や保護者と本人の関係がこじれてしまうと、対応がかなり難しくなってしまう点は要注意である。

#### 学校に行けないタイプにおける教師の具体的対応のポイント

第一に、学校に戻りたいと思った時に、本人のペースで戻りやすい態勢を整えることである。不登校状態から教室に入るということは、周りの人が考えるよりもはるかにハードルが高いことである。そのハードルを少しでも低くするために、例えば相談室登校や保健室登校の体制を作ったり、途中から教室に入りやすいように廊下側の後ろの座席にするなどの配慮は有効である。

第二に、決めた登校ペースは守ることである。例えば、本人と教師で教室に入るのは1日1時間と決めていたにもかかわらず、教師が「もう1時間入らないか」と延長を申し出るということがよく見られるが、これは誤った対応である。教師の提案は断りにくいいため、その場は延長して教室に残るかもしれないが、その後

は約束を守らなかった教師に対する不信感が生じたり、疲れて状態が悪化するという事態になる。一度決めた登校ペースはきちんと守ることが安心して教室に戻る上で重要であり、教師の一方的な考えで延長などはしない方がよい。もし登校ペースを変えるのであれば、きちんと本人や保護者と話し合っ、双方が納得した上で変更するべきである。

第三に、継続的な家庭訪問を行うことである。このタイプは登校へのモチベーションがあるため宿題やプリントが欲しかったり、時間割を聞きたい場合も多い。家庭訪問でこれらの情報を伝えることは重要であるし、教師が来てくれることで児童生徒は学校とのつながりを感じることができる。また、教師にとっても家庭訪問をすることで本人の様子を見ることができ、その表情やエネルギーの状態など、現状をアセスメントしやすくなる。家庭訪問の際は、エネルギーを回復することが先決であるため、学校の話よりも、楽しかったことや趣味など、話をして元気が出るような他愛のない話をするのがよい。

#### 学校に行けないタイプにおける保護者の具体的対応のポイント

第一に、ゆっくりと休める環境を整えることである。まずはエネルギーを蓄えることが重要であり、豊かな不登校を行うために、本人がホッとできる時間や楽しめること、嬉しい体験などが持てるようにするといいだろう。

第二に、親子のコミュニケーションを取ることもある。保護者が子どもの話に耳を傾け、子どもが保護者は自分の状態をわかってくれていると感じることで、子どもは安心でき、家庭が居場所として機能するようになる。その際に大切なのは、他愛のない話をすることであり、登校を促す関わりは逆効果である。

第三に、簡単なお手伝いなど家でやれることを増やし、できていることを認めることである。何もすることがないと、人は色々と考え込みがちであり、何もできていないという自責感を持ちやすくなる。また、何か行動をすることでやる気が出てくることもある。家でお手伝いなど役に立てる機会を作り、それに対して「ありがとう」や「助かった」など感謝やできたことを認める言葉を伝えることで、自己効力感が高まり、自責感が和らぐと考えられる。ただし、本心で思っていないことを誉めるおべっかは逆効果である。できているところを認める際は、小さなことでもいいので、本当にできていると感じていることを伝えることが大切である。

第四に、保護者も自分の人生を生き、子どもと一緒に居すぎないようにすることである。子どもが不登校になると、保護者は子どもに付きっきりになり、あたかも子どもの人生が自分の人生かのように感じることもある。また、子どもと常

と一緒にいると、どうしてもできていないところに目が行きがちになる。そのような状態では、保護者は子どもの一挙手一投足に一喜一憂し、また思い通りにならないれば落ち込んだりイライラしたりしてしまう。たまには子どもに留守番を頼んで出かけたり、仕事をするのもいいだろう。親という字は「木の上に乗って見る」と書くが、特に思春期以降は、保護者と子どもは別の人間であり、別の人生であることを意識し、木の上から見守るくらいの意識で関わるのがよい。

以上、学校に行けないタイプについて述べたことをまとめたものを Table4 に示す。

### 自分の意志で休むタイプ

「学校に行かない積極的理由があるかどうか」で、「学校に行かない積極的理由がある」を選択した場合、自分の意志で休むタイプとなる。

#### 自分の意志で休むタイプの特徴と対応のポイント

このタイプは、学校に行く以外にやりたいことがあるなどのポジティブな理由のもの、学校に行く以外にやらなければならないことがあるなどのネガティブな理由のものがある。ポジティブな理由としては、アイドル活動をしていたり、音楽のプロになるためにレッスンを受けているなどがあり得る。ネガティブな理由としては、保護者のネグレクトのため家事などをしなければならないなどがある。いずれの場合も自分の意志で学校を休むことを選択している。

ポジティブな理由の場合は、基本的にはやりたいことを十分やってもらおうこと、そのために不登校を認めるという対応になる。夢のために学校に行くことよりも大事なことがあるのであれば、それをサポートすることが重要となる。

一方、ネガティブな理由の場合は、その問題を解決するように対応することが求められる。

#### 自分の意志で休むタイプにおける教師の具体的対応のポイント

ポジティブな理由の場合は、その方向性を応援する対応で問題ないが、学校とのつながりを保つために、配布物や行事などの情報はきちんと伝えておくといいだろう。本人の邪魔をしない程度につながり続けることが大切である。

一方、ネガティブな理由の場合は、問題を解決するために保護者と面談をしたり、社会的なサポートが受けられるように対応することが必要となることもある。とは言え、教師の立場では家庭に踏み込むことが難しい場合もある。そのような時には、スクール・ソーシャル・ワーカーを活用したり、児童相談所と連携を取ることも有効である。本人が安心して学校に行けるように、環境を整えるこ

Table4. 学校に行けないタイプ

特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自身も学校に行きたい、行かないといけないという気持ちが強い。</li> <li>・学校に行こうとすると身体症状が現れたり、身体が動かず固まってしまう。</li> <li>・学校に対するモチベーションはあるため、学校に行く準備はする。</li> <li>・休んでいる間に勉強をしたり、学校がある時間は外出をせずに過ごす。</li> <li>・学校を休んでも休めておらず、エネルギーが低下しており、暗い表情で過ごす。</li> <li>・少し調子がよくなると学校に行こうとして、疲れて再度休むを繰り返す。</li> <li>・夜も学校のことを考えて眠れず、朝起きれない。</li> <li>・背景に家庭の問題があり学校に行く余裕がないこともある。</li> <li>・不登校の中で多いタイプ。</li> </ul>
対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゆっくり休んでエネルギーの回復を図る。登校刺激は自責やエネルギーの低下を招くので控える。豊かな不登校を目指す。本人がホッとできる時間、楽しそうな時間、嬉しそうな時間を広げる。</li> <li>・本人が安心できる居場所を作る。</li> <li>・焦りは禁物。急に大きな変化が生じたら、それはどこか無理をしている可能性がある。変化は少しずつがよい。本人が頑張りすぎている時は、周りはプレーキ役になる。</li> <li>・強引に学校に連れていくことはリスクが高い対応。</li> </ul>
教師の具体的対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校に戻りたいと思った時に、本人のペースで戻りやすい態勢を整える。相談室登校・保健室登校の体制づくり。席を教室に入りやすい位置にする。</li> <li>・決めた登校ペースを守る。登校ペースを変える際は、本人、保護者が納得した上で変更する。</li> <li>・継続的な家庭訪問を行う。ただし、登校を促すことは逆効果。</li> </ul>
保護者の具体的対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゆっくりと休める環境を整える。</li> <li>・親子のコミュニケーションを取る。</li> <li>・簡単なお手伝いなど家でやれることを増やし、できていることを認める。ただし、おべっかは逆効果。</li> <li>・保護者も自分の人生を生き、子どもと一緒に居すぎないようにする。外出をしたり、趣味を持ったり、仕事をしたりする。</li> </ul>

とが重要となるだろう。

#### 自分の意志で休むタイプにおける保護者の具体的対応のポイント

ポジティブな理由の場合は、保護者としてもその方向性を応援する対応をしてもらうとよい。その際、学校には休む理由と、どのように対応をして欲しいのかについて学校と情報共有をしておく、教師も安心して見守ることができる

う。

ネガティブな理由の場合は、子どもが家庭のために自分の意志で学校を休むという選択をしていることに、保護者が気づいていない場合もある。子どもがどのような気持ちで学校を休んでいるのかが理解できれば、保護者としての関わりも変わってくる可能性がある。そのためには日頃から子どもとコミュニケーションを取ることも大切ではあるが、子どもは親に心配を掛けたくないという理由で自分の気持ちを話さないこともある。そのような場合は、養護教諭やスクールカウンセラーなど、外部の話しやすい人（キーパーソン）を頼ってみることも役に立つと思われる。

以上、自分の意志で休むタイプについて述べたことをまとめたものを Table5に示す。

Table5. 自分の意志で休むタイプ

特徴	ポジティブな理由 ・学校に行く以外にやりたいことがある。 ネガティブな理由 ・学校に行く以外にやらなければならないことがある。
対応	ポジティブな理由 ・やりたいことを十分やってもらう。そのために不登校を認める。 ネガティブな理由 ・問題を解決するように対応する。
教師の具体的対応	ポジティブな理由 ・やりたいことを応援する。 ・配布物や行事などの情報を伝えるなどのつながりは保つ。 ネガティブな理由 ・問題解決のために保護者との面談や社会的サポートを活用する。スクール・ソーシャル・ワーカーや児童相談所なども連携する。
保護者の具体的対応	ポジティブな理由 ・やりたいことを応援する。 ・学校と休む理由や対応について情報共有する。 ネガティブな理由 ・子どもと日頃からコミュニケーションを取る。 ・養護教諭やスクールカウンセラーなど子どもが話しやすいキーパーソンを見つけて話を聞いてもらう。

### 学校に行く意味がないタイプ

「学校に行かない積極的理由があるかどうか」で、「学校に行かない積極的理由がない」を選択した場合、学校に行く意味がないタイプとなる。

### 学校に行く意味がないタイプの特徴と対応のポイント

このタイプは、学校に行く意味は感じられないが、かと言って、何かやりたいことがあるわけでもない。中には、勉強が嫌というわけでもないため、塾などには問題なく行けることもある。「学校に行くことに何の意味があるのか」などの哲学的な疑問を抱いている場合もある。エネルギーがないわけではないが、それを向ける方向性を見いだせないでいると考えられる。非行の児童生徒の中にもこのタイプが見られ、方向性が決まればまじめに勉強する人もいる。このタイプは、学校に行く意味や、自分の生き方の方向性を見つけていく必要があるため、長期的な関わりが必要になる可能性がある。

対応としては、第一に、学校に行く意味を見出すか、学校に行く代わりにやりたいことを見つけること、つまり、エネルギーを向ける方向性を探索することが挙げられる。このタイプはエネルギーや動ける力はあるが、その向け方がわからないと考えられるため、学校に行くようになることに焦点を当てるよりも、本人がやりたいことを見つけること、エネルギーを向ける方向性を見出すことが重要となる。文部科学省（2022b）が言うように、学校に行くことは本質的な目的ではない。児童生徒が自ら満足できる人生の選択をすることが大切なのであり、登校するというはその幅を広げる一つの選択肢である。そのため、たとえ学校に行かないという選択肢を取ったとしても、本人が自発的に生きる方向性を見いだせれば、それでいいのではないだろうか。

第二に、学校への復帰を考える場合も、本人がやる気が出るまで、あるいは切羽詰まるまで待つことも重要である。特に、中学生の場合、高校入試は一つ自分の将来を考える契機となり得る。そのため、受験が近づき、方向性を決めなければならぬ状況に置かれると、学校に来れるようになる児童生徒もいる。周りが焦ったところで、本人が自発的に学校に行こうと思わない限り、なかなか学校へは行けないし、行ったとしても長続きしない。逆に、このタイプは学校に行く意味を見出すことができれば、自発的に学校に行くようになるのである。

### 学校に行く意味がないタイプにおける教師の具体的対応のポイント

第一に、辛抱強く待つことである。特にこのタイプの場合、方向性が定まるまで時間がかかり、なかなか変化も見られないこともある。そして、このようなタイプの児童生徒は「怠学」として放置されがちである。しかし、本人が学校に行こうというモチベーションが出てきたタイミングで介入するためには、教師等がそのタイミングまで継続的に関わり続けている必要がある。本人が動き始めるまで待てることが、このタイプへの関わりで最も重要だと言える。

第二に、特に中学生以上の場合、進路に関する情報を伝え、将来像を描くサポートをすることである。進む方向性を考えようとしても、本人や保護者だけでは、どうしても得られる情報が限られてしまう。その点、教師は高校や大学、専門学校などの色々な情報を得やすい立場にある。本人の関心などを掘り起こしながら、本人の進路に合うと思われる学校等のパンフレットを渡したり、体験入学やオープンキャンパスの情報を伝えたりなど、進路に関する具体的な情報を示すことができれば、本人も将来像をイメージしやすくなるだろう。

第三に、小学生などは、友達を重要なリソースとして活用することである。小学生にとって、学校に来る楽しみの一つは、友達と会って、一緒に遊べることである。友達は重要なリソースとなりうるため、例えば、友達から声をかけてもらうなどの関わりを促すのもいいだろう。小学生では、学校に来る楽しみをいかに作っていくのかが一つのポイントとなる。

#### 学校に行く意味がないタイプにおける保護者の具体的対応のポイント

第一は、辛抱強く待ちながら、関心の方向性を探ることである。子どもが何か関心があることについて話をした際には、まずは子どもがやりたいことを否定せずに聞いてみることである。子どもが夢（例えばユーチューバーなど）を語ると、保護者はつい「そんなの無理よ」などと、その語りを否定しがちである。しかし、そこで子どもの語りを否定すると、子どもは「親に話しても無駄」と思うと共に、夢を見ることを諦め、自分の方向性を見失ってしまう。夢は、その人の生き方の核である。夢や関心について語られた時には、まずは否定せずにその話を聞いてみるとよい。そして、それを具体化するにはどうしたらいいのか、何が必要なかなどについて、一緒に考えてみるといいだろう。たとえ、夢をそのまま叶えるのが難しいとしても、その夢を核として、より現実的な方向性を探索していけるといいと思われる。

第二に、高校や大学、専門学校等の資料を学校に取り寄せてもらったり、高校見学や体験入学、オープンキャンパスなどに行き、情報の収集と具体的なイメージづくりをすることである。特に体験入学やオープンキャンパスは、その学校が自分に合うかどうかを肌で感じるができる機会である。パンフレットではいいと思っていたが、実際に行ってみるとイメージと違ったということもよくある。実際にその学校を見学することで、自分の将来像のイメージアップができるだろう。

第三に、通信制高校や通信制大学、オルタナティブ・スクールなど、多様な選択肢を考えてみることである。現在、様々な学校や仕事の在り方が認められるよ

うになってきている。「一般的な」ルートに拘るのではなく、「自分の子どもに合った」ルートを考えられるといいだろう。

以上、学校に行く意味がないタイプについて述べたことをまとめたものを Table6に示す。

Table6. 学校に行く意味がないタイプ

特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校に行く意味は感じられないが、積極的理由も見られない。</li> <li>・塾などには問題なく行けることもある。</li> <li>・哲学的な疑問を抱いている場合もある。</li> <li>・エネルギーはあるが、向ける方向性を見いだせない。</li> <li>・方向性が決まれば動ける。</li> <li>・長期的な関わりが必要になる可能性がある。</li> </ul>
対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・エネルギーを向ける方向性を探索する。</li> <li>・本人がやる気が出るまで／切羽詰まるまで待つ。</li> </ul>
教師の具体的対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・辛抱強く待つ。</li> <li>・進路に関する情報を伝え、将来像を描くサポートをする。</li> <li>・友達をリソースとして活用する。</li> </ul>
保護者の具体的対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・辛抱強く待ちながら、関心の方向性を探る。</li> <li>・情報の収集と具体的なイメージづくりをする。</li> <li>・多様な選択肢を考える。</li> </ul>

## 全体として知っておくとよいこと

以上、それぞれのタイプについて説明をしてきた。最後に、全体として知っておくとよいことについて述べる。

### 待つことの重要性和関わりのタイミング

いくつかのタイプで、待つことの重要性を指摘した。不登校児童生徒への対応は色々と言われているが、ただその通りにやればよいというものではない。関わりには「機」やタイミングがあり、そのタイミングに至るまで「機が熟すのを待つ」ことが必要な場合もある。待つことの必要性を伝えると、「何もしなくていいんでしょか」と言われることがあるが、待つことは決して何もしないことではない。待ちながらも、タイミングを計るために観察し、タイミングを捉えて介入することが重要である。やみくもに行動しても良くなるものではなく、タイミングを外した対応は、逆に児童生徒を傷つけたり、回復を遅らせてしまうことになる。

また、周りの人の不安や焦りから行動しようとする、周りが「待てない」という状態もある。しかし、このような周りの不安から生じた関わりは、本人のニーズとズレて、逆効果になることが多い。待つことは、児童生徒・子どもの持っている回復力や成長力を信頼することである。必要な環境を整えたら、後は余計なことをせずに、本人の回復力や成長力を信じて待つことが、本人の持つ自然治癒力や実現傾向を発揮させるために重要なのである。

### プロセスの視点を持つ

関わりのタイミングを考えると共に、プロセスの視点を持つことも重要である。ある時期に適切な対応が、別の時期にも適切かということ、そういうわけではない。よく、不登校の児童生徒には登校刺激を与えてはいけないということを頑なに守っている場合があるが、それは必ずしも適切な対応とは言えない。エネルギーが落ちていたり、学校に行かないという焦りが強い場合は、登校刺激を与えることはプレッシャーとなり、逆に不登校を長引かせることになる。しかし、エネルギーが出てきて、ちょっと学校に行ってみようかなという気持ちが出てきた時には、教師や保護者の側が少し登校を促すことで、一步を踏み出しやすくなるかもしれない。やたらめったら登校刺激を与えるのはよくないが、プロセスの中で、その時々合った関わりに修正していくことは重要である。

また、不登校は、調子が良くなったり悪くなったりを繰り返しながら、少しずつ回復をしていくことになる。最初は頑張りすぎて、溜めていたエネルギーを使い果たして引きこもってしまうということもよく起こる。そうすると、教師や保護者はそれに合わせて焦ったり落ち込んだりすることがある。しかし、その頑張りすぎて調子を崩したという体験自体が、本人が今は頑張りすぎてはいけないということを学ぶ機会となり、教師や保護者にとっても、これまでの関わり方について振り返る一つのチャンスとなる可能性がある。このような、うまくいったりいかなかったりを繰り返しながら、自分自身について学び、成長し、回復していくのである。そのため、周りは、調子の良し悪しに一喜一憂するのではなく、それもプロセスの一部であると考えて、どっしりと構えられるといいだろう。そして、不登校の児童生徒や保護者のカウンセリングをしているとよく聞くことであるが、不登校の回復のプロセスを通して、保護者も本人も人生の見方や価値観が変わり、成長をすることになるのである。

### 児童生徒・子どもは大人が考える以上に考えている

教師や保護者は本人に対して「このままではだめ」とか「学校に行かないといけない」などと言うことがよくあるが、実際には、本人は学校に行かないといけないことはわかっているし、他人よりも余程自分の状態について考えている。しかし、わかっているからこそ、凶星を突かれるほどやる気が削がれ、自分について語れなくなるのである。そのため、本人が一番考えているし、悩んでいるという前提で話を聞いていくことが大切である。

### 児童生徒・子どもには自分のペースがある

不登校の回復はプロセスであり、本人のタイミングがある。これは、不登校の回復には本人のペースがあるとも言い換えることもできる。本人の準備が整わない限り、周りがいくら登校を促しても、登校できないだろう。大切なのは、本人が自発的に、自分のペースで回復していくことであり、周りがその邪魔をしないことである。人は人である前に生物であるが、植物をいくら早く育てたいからと言って、水や養分をやりすぎると根腐れをして死んでしまう。あくまでその植物の持つペースで育つのである。人も同様に、本人に合わない関わりをすると、逆に本人の力を殺してしまうことになり得る。本人を学校という枠組みに当てはめようとするのではなく、本人のペースに周りが合わせていくことが大切なのである。

### ボタンの掛け違いが不幸を生む

多くの場合、子どもの幸せを望まない保護者はおらず、児童生徒の幸せを望まない教師はいない。教師や保護者は本人のためを思って熱心に関わるだろう。しかし、教師や保護者が良かれと思って行ったことであっても、もしそれが本人の求めているものとズレていたならば、誰が悪いわけでもないが、結果として本人を苦しめてしまうという、不幸なすれ違いが起こる。そのような場合、周りが熱心に対応すればするほど、子どもは苦しくなる。このような不幸なすれ違いを適切な形に戻すためには、今一度、本人の話に耳を傾け、本人が望んでいるニーズをきちんと理解し、本人のニーズと周りの対応とのズレを修正していく必要がある。

### 笑顔が対応の指標となる

では、本人のニーズと周りの対応が一致しているかどうかは、どのように判断

すればよいだろうか。その判断の指標は、本人が笑顔かどうかである。もし本人に何らかの関わりをした時に、安心した表情や楽しそうな表情、うれしそうな表情、何よりも笑顔が見えた時は、その関わり方は本人のニーズに合っており、エネルギーを与え、成長を促進するだろう。逆に、周りの関わりによって不機嫌になったり、悩んだり、きつそうな表情をする時には、その関わり方は本人のニーズとはズレており、その関わりを行えば行うほどエネルギーを消費していく。笑顔を増やす関わりをしていくことで、よい関係を築くことができ、本人も少しずつ生き生きするようになっていくだろう。

### 教師等が知っておくとよいこと

次に、どのタイプにおいても、教師等が知っておくとよいことについて述べる。

#### 教師間での情報共有と対応の統一

教師間で情報共有をし、対応を統一することは重要なことである。児童生徒や保護者が学校や教師に対して信頼を損ねる行為の一つに、学校内での対応が統一されていないことがある。例えば、担任は保健室登校を認めているのに、それを知らない教師が「早く教室に行け」と指導する場合のように、教師によって言うことが異なると、児童生徒や保護者は混乱してしまい、そのような混乱を生んだ学校へ不信感を募らせる。学校全体で情報を共有し、対応を統一することによって、余計な混乱を防ぎ、安心して登校に向けてのステップを歩めるようになるのである。

#### 家庭訪問の在り方

家庭訪問は不登校児童生徒への対応として非常に有効な関わりであるが、やり方を間違えると逆に、児童生徒や保護者の不信感を買うことになる。家庭訪問のポイントとしては、第一に、細く長く続けることである。初めは毎日家庭訪問に行っていたが、長期化すると訪問回数が減っていくケースがある。このような家庭訪問の頻度の減少は、本人や保護者からすると、「先生はもう自分には関心がなくなったんだ」と受け取られ、教師への不信感を生み出す。また、家庭訪問の意義の一つに、継続的に児童生徒に会うことで、介入のタイミングをアセスメントすることがある。介入にはタイミングが重要であり、そのためには継続的、長期的に家庭訪問を行い、直接会って、現状を把握する必要がある。さらに、家庭訪問の際に時間割や行事予定、授業のプリントなどを渡すことで、本人が学校に行こうと思った時にスケジュールが立てやすくなったり、現在の授業の進み具合を把握できたりする。このように、家庭訪問は、週1回でいいので、継続して長期

的に家庭訪問を行うことが重要である。

なお、家庭訪問の目的は、安心できる関係づくりやアセスメントであり、登校刺激を与えることではない。本人が登校に興味を示した場合には、頻度や時間など具体的な計画を一緒に立てたりすることは有効だが、基本的には趣味や将来の夢など、他愛のない話をする方がよい。

### 専門機関の紹介をする際のコツ

以前に比べ精神科や心療内科、療育に対する理解は得られるようになってきたが、それでも本人や保護者が専門機関に通うことに抵抗感がある場合がある。自殺など緊急な場合は別として、専門機関を紹介する際にはその必要性を慎重に説明し、本人と保護者が納得した上で専門機関を勧めるのがよい。専門機関の必要性を説明する際には、本人や保護者の困り感を掘り起こすことが有効である。本人や保護者が困っており、専門機関に行くことでそれが楽になる可能性があると思うことができれば、専門機関へのモチベーションは高まるだろう。例えば、不眠や食欲低下は本人が自覚しやすい症状なので、これらの有無を確認し、もしそのような症状があるのであれば、改善のために専門機関を紹介するのもいいだろう。また、発達的な特性を抱えている可能性がある場合は、忘れ物が多いなど、予想される不適応的な行動や困り事があるかどうかを振り返ってもらうことで、困り感が生まれ、その解消のために専門機関を紹介しやすくなる。まずは困り感を持ってもらうことが、専門機関への紹介の第一歩である。

### おわりに

最後に、本論文を読む上で重要なことは、書かれている内容を真に受けすぎないことである。本論文では不登校のタイプを6つに分類しているが、あくまで大まかな分類に過ぎない。一つの指針にはなるが、実際には不登校の子どもは一人一人異なる。不登校の対応は一つとして同じものではなく、試行錯誤の連続である。本論文に書かれていることを試しにやってみて、うまくいっているかどうかは笑顔で判断する。本人の笑顔が増えれば継続し、そうでなければ別の工夫を考えてみる。不登校支援の対応のキーワードは、笑顔、つながり、安心である。

## 引用文献

- 五十嵐哲也・荻原久子 (2002): 中学生における不登校傾向に関する研究 (1) —不登校傾向尺度の開発—, 日本教育心理学会総会発表論文集, 44, 275.
- 伊藤 透 (2007): 不登校児童・生徒のタイプ分けと教師の対応との関係—教師による児童・生徒理解と耐性・社交性の視点から—, 日本教育心理学会総会発表論文集, 49, 284.
- 小泉英二編 (1973): 登校拒否—その心理と治療, 学事出版
- 松本俊彦 (2018): 薬物依存症, ちくま新書, 301.
- 文部科学省 (2014): 「不登校に関する実態調査」～平成18年度不登校生徒に関する追跡調査報告書～, [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1349949.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1349949.htm)
- 文部科学省 (2019): 「不登校児童生徒への支援の在り方について (通知)」, [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1422155.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1422155.htm)
- 文部科学省 (2022a): 令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について, [https://www.mext.go.jp/content/20221021-mxt\\_jidou02-100002753\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20221021-mxt_jidou02-100002753_1.pdf)
- 文部科学省 (2022b): 不登校に関する調査研究協力者会議報告書別添資料1.6, [https://www.mext.go.jp/content/20220610-mxt\\_jidou02-000023324-04.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20220610-mxt_jidou02-000023324-04.pdf)
- 文部科学省 (2022c): 不登校に関する調査研究協力者会議報告書概要, [https://www.mext.go.jp/content/20220610-mxt\\_jidou02-000023324-02.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20220610-mxt_jidou02-000023324-02.pdf)
- 村上慎一 (2008): 不登校児童生徒に対する理解と支援に関する研究, 愛知県総合教育センター研究紀要, 97, 1-10.
- 館農 勝 (2019): 発達障害とインターネット依存の現状と対策, 児童精神医学とその近接領域, 60(1), 28-31.